國學院大學学術情報リポジトリ

ナシ族におけるナシ語意識：ナシ語メディアを中心に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 黒澤, 直道, Kurosawa, Naomichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000013

ナシ族におけるナシ語意識
—ナシ語メディアを中心に—

黒澤直道

一、はじめに

ナシ族（納西族）は、中国西南部に分布する人口約三二万人の少数民族である。[1] その居住地は、雲南省西北部の麗江市を中心として、その北に位置する迪慶チベット族自治州や、その東北の四川省にも広がっている。麗江市は、そのほとんどが海抜二四〇〇メートル前後の高地に広がり、ナシ族はこの地で周囲の様々な民族と接触を保ちながら生きてきた。（写真一）

麗江市の北に位置する迪慶チベット族自治州は、チベット族を主要な民族とする州であり、その西北はチベット族自治区に接している。チベット族は麗江市にも居住しており、一部のナシ族も迪慶チベット族自治州やチベット自治区に居住しているため、ナシ族がチベット族と接する機会は非常に多い。また、麗江市の東北部には寧蒗彝族自治県があり、言語系統の近いイ語（彝語）を話すイ族（彝

（写真1）麗江旧市街の路地

族）が多く居住する。そのさらに東北方面には四川省の凉山彝（イ）族自治州がある。また、麗江市の西北には、行政上は迪慶チベット族自治州に含まれる維西傈僳（リス）族自治県があり、リス族（傈僳族）が多く居住する。この地域では、高地にリス族、その下にナシ族という住み分けがしばしば見られる。リス族は麗江市にも住んでおり、特に標高の高い地区に多く分布する。さらに、麗江市の南は大理白（ペー）族自治州である。ナシ族とペー族（白族）との関係は深く、麗江にも多くのペー族が居住し、ナシ族とペー族で結婚した夫婦もしばしば見られる。

これらの少数民族のほか、麗江市やその周囲には多くの漢族が居住している。麗江は古くは元代には中央王朝の支配下に入り、続く明清代から現代に至るまで、漢族を中心とする人々の文化が浸透してきた。長期に亘りナシ族の生活文化や風俗習慣に最も大きな影響を及ぼしてきたのも漢族であると言えよう。現在、麗江市に住むナシ族でも、その祖先は外地から移住してきた漢族であるというケースも多い。（写真二）また現在では、「世界文化遺産」として知られる麗江旧市街のように急速な観光地化が進行している地域では、観光産業の需要を目当てにした漢族を中心とする流入人口が急増している。多くのナシ族の住民は住んでいた家を貸し出すなどして郊外に移住したため

（写真2）旧市街のナシ族住居には漢族文化の影響が色濃い

（それらの伝統的住居は宿屋、店舗などに改装されている）、ナシ族の人口は激減している。

このような多くの民族に囲まれたナシ族の状況は、彼らの言語生活にも色濃く反映している。ナシ族の話す主要な言語はナシ語であるが、同時に、ほとんどのナシ族は漢語を話すことができ、さらに一部のナシ族は、チベット語、リス語、イ語、ペー語などを話すこともある。同じ地域のリス族などに比べ、ナシ族にはより広く漢語が浸透しており、ナシ族の多くはナシ語と漢語のバイリンガルであると言ってよい。このようなナシ族をめぐる言語状況は、彼らの自民族の言語に対する意識にも大きな影響を与えてきた。

本稿では、ナシ族におけるナシ語の教育や、ナシ語が使われる現地のメディアを主な材料として、ナシ族が自民族の言語で

あるナシ語をどのように捉えてきたか、そしてそこにどのような変化が見られるかを考察する。

二、ナシ語の概要と使用状況

ナシ語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のイ語系に属し、同系の言語にはイ語、リス語、ハニ語、ラフ語、ペー語などがある。[2] これらの言語を話す民族は、一般的には古代羌人の末裔とされている。紀元前四世紀頃、現在の青海付近で遊牧生活を送っていた羌人は秦の圧迫を逃れて南下し、四川、雲南を経由する過程でその一部はこれらの土地に定着したと言われる。しかし、ナシ族には農耕民の文化的要素も色濃く見られるため、南下してきた遊牧民と土着の農耕民の融合という側面も重要視されている。[3]

ナシ語の標準的な音節の構造は（C）V／Tである（C＝子音、V＝母音、T＝声調）。母音は単母音を主とし、複合母音は少なく、音節末に子音はない。また、声調の構造も比較的単純である。このため、漢語からナシ語に入った借用語は、二重母音や三重母音が縮約し、音節末の子音が脱落するなど、発音面で大きくナシ語の音節構造の影響を受ける。こうしたナシ族独特の「訛り」は、しばしば漢族などからナシ族の話す漢語の「分かりにくさ」として言及されることがある。[4] ナシ語の文法の特徴は他のイ語系の言語と類似しており、その最も基本的な語順はSOVである。漢語とは目的語（O）と動詞（V）の語順が逆になるため、ナシ族が漢語を話す場合には、語順の面でもナシ語の一定の影響を受けることがある。

中国でこれまでに行われた研究では、ナシ語には東西に大きく二つの方言があるとされている。このうち、東部方言は寧蒗彝族自治県永寧郷を中心に居住するモソ（あるいはナ）と呼ばれる人々によって話される方言であり、西部方言は麗江市の古城区や玉龍ナシ族自治県に広く分布するナシと呼ばれる人々によって話される方言である。さらに、この二つの方言の内部にも、さらにいくつかの下位方言が区別されており、東部方言の中には永寧方言、瓜別方言、北渠壩方言の三つがあり、西部方言の中には大研鎮方言、麗江壩方言、宝山州方言の三つがある。このうち、大研鎮方言は、大研鎮（現在の古城区の中心部を指す旧称）で話される方言である。麗江壩方言は、大研鎮を取り囲む広大な農村部で話される方言であり、金安、七河、大東などいくつかの郷と、現在の玉龍ナシ族自治県で主に話され、さらに麗江市に隣接する維西リス族自治県や迪慶チベット族自治

州のナシ族においてもこの方言が話される。宝山州方言は、大研鎮の北方に位置する大具郷、宝山郷、奉科郷で話される方言である。現在のナシ族の意識の中では、政治・経済の中心地であった大研鎮の方言は漢語の影響を深く受けたものであり、すでに「半分は漢語である」と言われることもある。一方、比較的開発の遅れた地域で話される麗江壩方言や宝山州方言は、より純粋なナシ語を残した方言であると理解されている。また、一方で麗江市西北部の麗江壩方言はチベット語の影響を受けているという考えもあるため、彼らの考える最も「純粋」で「正統的」なナシ語としてしばしば挙げられるのは、宝山州方言のナシ語である。

現在のナシ語の語彙には、多くの漢語由来の借用語が含まれている。漢語からの借用語の比率は地域や世代によって差があるが、地域的な傾向としては、概して、麗江市の中心部では非常に多くの漢語由来の借用語が用いられ、周辺の農村部ではこれに比してやや少ないと言える。また、老人と若者の間にもかなりの差があり、特に麗江市中心部で生活する若者には、ナシ語を話せない者も多い。このような傾向は、ナシ族の中でのナシ語やナシ族文化の捉え方にも密接に関連している。それは、政治・経済の中心であった麗江市の中心部は漢族の影響を深く受けた地域であるため、ナシ語やナシ族文化という点ではすでに荒廃した地域であり、一方の周辺の農村部は、よりナシ語やナシ族文化が残された地域であるという見方である。こうした見方は、彼らのナシ語に対する意識や、近年のナシ語の保存・継承運動にも影響を与えている。

ナシ族の名を世界に知らしめた文化として、その特徴的な文字がある。ナシ族の祭司であるトンバ（東巴）が使う伝統的な文字は、彼らの名を取って「トンバ文字」と呼ばれ、現在世界で使われている唯一の象形文字であるとされている。[5] 一九世紀後半、ナシ族の文字は当地を訪れた西洋の宣教師や探検家によって着目され、二〇世紀の前半には、現地に長期間居住して大量の研究を残したジョゼフ・ロックのような研究者も現れた。トンバ文字を中心としたナシ族の宗教文化は「トンバ文化」と呼ばれ、特に一九八〇年代以降の中国において、ナシ族出身の学者を中心として大々的に研究が進められてきた。そのため中国においては、トンバ文化こそがナシ族文化の神髄であるという考えも根強い。これはナシ族の中にも深く浸透しており、彼ら自身の文化や言語に対する意識に強い影響を与えている。しかしトンバ文字は、宗教経典で使われるという特殊性や、言語の成分と文字の成分が十分に対応しないという特徴から、本来、

一般のナシ族には理解し難い文字であり、実用的な目的で使われた例はほとんどなかった。一方、日常的に話されるナシ語を記すためには、これまでにいくつかの文字が考案されている。ナシ族の中での普及は必ずしも進んではいないものの、これらの中で最も多くの出版物があるものは、「ナシ族文字方案」と呼ばれる方式で記されるラテンローマ字の表記法である。この表記法は、中国で一九五六年から五七年にかけて草案が作成され、文化大革命期の中断を経て、一九八〇年代に複数回の修訂がなされ、それ以降、ナシ語による新聞、書籍などで用いられている。

近年のナシ語の使用状況については、これまで公表された正確な統計はないものの、麗江市の中心地である古城区の小中学生においては、ナシ語を話せるナシ族の児童の割合は三〇パーセント以下であるという。[6] また、五〇名の小学三年生に対して行った調査では、日常生活においてナシ語を多く使うナシ族の児童の割合は一二パーセントであったという。[7] 二〇〇五年に古城区の白龍潭小学校で行われた調査では、同校の五一二名のナシ族の児童の中でナシ語を話せる者は一一八人、二三パーセントであったという数字もある。[8] また、年齢階層の異なる旧市街で生まれ育ったナシ族計九〇名を対象にした趙慶蓮氏の調査では、漢語とナシ語の熟練度は年齢によって異なり、老年世代ではナシ語の熟練度が漢語より高いものの、中年世代では両者はほぼ同等であり、青年世代では漢語の熟練度がナシ語の熟練度を上回るという結果が示されている。また、すでに青年世代では幼児期に獲得する第一言語は漢語であり、ナシ語は第二言語として習得されていると言う。[9] もっとも、これらの調査からさらに数年を経た現在では、麗江旧市街のナシ族人口自体がさらに減少している。二〇一四年七月に筆者が訪問した旧市街に位置する小学校では、平均約五〇人のクラスの中で、現在、ナシ族の生徒ははわずかに三、四人であると言う。従ってここから、旧市街のナシ族人口も大幅に減少していることが推定できる。

一九八〇年代以前には、麗江の教育現場においてはナシ語の教育は行われてこなかった。[10] 一九八〇年代にナシ族文字方案の修訂が行われて以降、これを用いた小学校用の教科書が刊行され、一部の小学校ではナシ語の教育が試行された。実施された地域は、巨甸区依隴郷巴甸（現在の玉龍納西族自治県塔城郷依隴村）や白沙郷玉龍村などであり、小学校低学年でのナシ族文字方案を取り入れた教育と、成人を対象とするナシ語の識字教育が行われた。一九八四年から一九八八年までの間に三八四クラス、計五七九九人が参加し、二二三六人が文盲を脱したとさ

れる。[11] しかし、文盲の撲滅を主な目的としたこの教育が行われたのは、漢語が十分に浸透していない山間部や、麗江の中心から離れた地域に限られていた。すでに漢語が浸透している地域では、文章語として漢語を用いる方が現実的であるため、ナシ語の文字の普及運動を展開する必要はないと判断されたためである。さらに、一九九〇年代以降はこの教育は衰退し、二〇〇〇年代には当初行われたいくつかの小学校でのナシ語教育はほぼ全て停止している。

一方、一九九〇年代の後半には、トンバ文化の伝承者が高齢化し、次々と世を去る状況となったため、これらの文化を若い世代へ継承しようとする活動が始まる。この時期から、「伝承館」などと呼ばれる組織において、トンバ文字や儀礼などの伝承教育が行われ、その一部は現在も継続している。そして、トンバ文化の伝承教育の一環として、少しずつではあるがナシ語の教育も行われるようになった。黄山郷の黄山小学校や古城区の興仁小学校においては、ナシ族の歴史学者である郭大烈氏やその夫人の黄琳娜氏の精力的な活動により、トンバ文化教育の一環としての「母語課」の授業が試験的に設置された。

その後、二〇〇三年一月、麗江県の人民代表大会常務委員会において「全県の小学校教育におけるナシ語の伝承・普及教育開設に関する決議」が採択され、[12] 同年九月には古城区の多くの小学校で正式に「母語課」の授業が開始された。これらの授業では基本的にナシ語と漢語が併用して教えられているが、授業のコマ数は少なく、教材や教授方法についても模索の途上にある。

三、各種ナシ語メディアにおけるナシ語意識

㈠　一九九〇年代までのナシ語意識

『麗江納西文報』は、一九八二年一〇月から試験的に発行され、一九八五年一二月に正式に創刊されたナシ語による新聞である。[13] 当初の発行元は、麗江納西族自治県民語委（民族語言委員会）であったが、この組織は一九九七年の機構改革により民族宗教事務局民族語文辦公室となり、さらに二〇〇三年の行政区分の変更により、玉龍納西族自治県民族宗教事務局に属することになった。これらの組織改革においては、ナシ語の編集者の人数が減らされている。『麗江納西文報』は、現代ナシ語の表記法であるナシ族文字方案に基づいて記され、主としてナシ族におけるこの表記法の普及を目指したものであるが、その発行は一年にわずか一、二号の発行にとどまり、さらに停刊した時

期もある。発行部数も極めて少なく、主として機関に配布され、書店などで売られることがなかったため、一般のナシ族の目に触れる機会はあまりなかったと思われる。また、頁数も僅かに四頁のみであった。筆者は一九九六年から二〇〇〇年までの間、およそ三年間、麗江に居住したが、この新聞の現物については、滞在三年目の最後の時期に、たまたま発行元の職員が持ってきたものを目にしただけであった。二〇〇三年三月、『麗江納西文報』は再び停刊したが、この停刊においては雲南省から付与された同紙の発行許可番号が他の出版物に移されたため、これ以降は発行が不可能となり、同紙はこの第八二号をもって事実上の廃刊を迎えた。

『麗江納西文報』の内容には、現地のニュースや、文化・生活面での記事が多く見られ、さらにトンバ文字の解説や教材などもある。発行の初期には、ナシ族文字方案の普及のための記事や教材などが多く掲載されていた。また、当初の記事はタイトルなどを除きナシ族文字方案によるナシ語のみで記されていたが、一九九三年九月発行の第六四号から、ナシ語と漢語の対訳となる。これは、ナシ語のみを話すナシ族の人口が減少し、この新聞をナシ語のみで発行することの意義が薄れてきたことや、すでにナシ語と漢語のバイリンガルとなっているナシ族には、ナシ語だけで書かれた紙面が分かりにくくなってきたためと言えよう。むしろナシ語と漢語を並列させて記した方が、ナシ族文字方案の普及にも効果的であると判断されたと見られる。

この他のナシ語による出版物としては、一九八〇年代から出版された小学校用の『語文』や『数学』の教科書、ナシ語による諺や民謡を記した書籍、農業技術の普及図書、科学知識の普及読本、憲法や条例、共産党の指導文書などの出版物がある。[14] しかし、総じて一九九〇年代の後半までは、これらの出版物にはほとんど注目が集まらなかった。筆者が麗江の市場の片隅で古書を並べて商いをしていた男性から聞いた話では、かつてこれらナシ語の出版物を何冊か入手したが、一見、英語のようでもあるが、良く見ればそうでもなく、いったい何語の本かもよく分からずに売っていた、とのことであった。この言葉からも、一般のナシ族におけるナシ族文字方案の表記法の認知度の低さが見て取れる。

また、漢語で制作された映画の音声をナシ語で吹き替えることは、一九八〇年代には試みられており、漢語が十分に浸透していない農村部での上映を目的としていた。しかし、おそらく上映された地域が限られていたことから、麗江の中心部のナシ

族にはこれらの映画の存在はほとんど知られていなかったと思われる。筆者の長期滞在期間中にも、一般のナシ族からこれらの映画についての言及は全く聞かれなかった。

㈡　二〇〇〇年以降のナシ語意識

二〇〇一年、麗江のラジオ局、麗江人民広播電台では、ナシ語によるニュースの放送が始まり、さらに麗江のテレビ局、麗江県電視台でもナシ語で一週間のニュースを振り返る「一週要聞」の放送が開始された。その後、二〇〇三年の時点では、土曜夜の約一〇分間の「一週要聞」と、[15]日曜夜の約五〇分間のトンバ文化の講座が放送されていた。ただし、これらの放送は麗江市の中心部である古城区の視聴者へ向けたものではなく、周辺の農村部の視聴者へ向けた玉龍台電視台で行われている。また、ナシ語の放送のアナウンサーは、宝山郷など麗江の中心部から離れた地域の出身者であり、そのナシ語には文体的に凝った言い回しが多用され、古城区の若者には全てを理解することはできないという。ここには、古城区のような漢語の影響を大きく受けた地域の出身者はアナウンサーに相応しくないという考え方が見て取れる。また、二〇〇五年には、「黄河絶恋」、「暖春」、「張思徳」など中国映画[16]のナシ語吹き替え版が相次いで制作されたが、これらの吹き替えも、ナシ語の放送と同様に、麗江の中心部から離れた地域の方言で行われている。その後の二〇一〇年には、玉龍県文化局によりテレビドラマ「狼毒花」（全三六回）のナシ語吹き替え版が制作されているが、これも農村部に向けた玉龍県電視台で放送されたものであった。

二〇〇五年前後から、麗江ではナシ語で歌うポップミュージックが制作されるようになる。それ以前にも、ナシ語の伝統的な民謡は歌われており、録音されたものがテレビで放送されたり、カセットテープの形で販売されてはいたが、すでに若い世代のナシ族には古臭いものと捉えられていた。一方、この時期から始まるナシ語の流行音楽は、それらナシ族の伝統歌謡よりは、むしろ中国の他の少数民族における現代的な流行音楽の影響を受けたものである。中国の少数民族における流行音楽のアーティストとしては、中国西南部で一九九〇年代の初頭から活動するイ族の山鷹組合がおり、イ族ではその後も続々と新しい歌手やグループが誕生している。また、四川省、青海省など、カム、アムド地域のチベット族においてもこうした流行音楽の活動が盛んであり、その点ではむしろ伝統民謡の盛んなラサなど中央チベットを凌ぐと言われる。これらの音楽は、ポップミュージックのリズムや旋律に、それぞれの民族独特のテイス

トを加えた特色を持ち、地元では強く支持されている。麗江のCD・VCD、DVD販売店では、香港、台湾や中国大陸の流行音楽の他、これらイ族、チベット族の流行音楽の製品が店頭に並び、店の中や外に置かれたスピーカーからもこれらの音楽が流されていることが多い。こうした下地の上に、ナシ族独自の流行音楽を求める機運が高まったと言えるであろう。少数民族とはいえ、イ族やチベット族はいずれも人口数百万を数える大民族であり、これに比してナシ族の約三二万という人口の規模を考えれば、この動きは特筆すべきものと言えるであろう。

この時期から活動を始めたナシ語流行音楽のアーティストには、肖煜光、和文軍、和漾水などがおり、その後も革囊渡組合、和慧珺など新しいグループや歌手が登場している。[17] 二〇〇五年に発売された肖煜光のアルバム「納西・浄土」では、ナシ族文化に見られる清浄なイメージを軸とし、これに流行音楽の要素を加味している。同アルバムに収録された「朋友」では、麗江から大都市へ出て戻らない友人に、故郷の温かさを歌いかけている。大研鎮出身の肖煜光が歌うのは大研鎮方言による歌であり、これも若い世代のナシ族の支持を得た。また、玉龍県大具郷の農村に生まれ、一九九九年から全国規模の歌手コンテストで多くの賞を獲得していた和文軍も、同年に故郷への思いを歌ったアルバム「楽土家園」を発売し、その後も、アルバム「麗江・礼物」（二〇〇七年）、「你麗江了嗎」（二〇一〇年）を続けて発表している。また、二〇〇九年にロック風の曲「二月八」を発表した革囊渡組合は、和国軍（別名は納若、麗江市玉龍納西族自治県民族歌舞団所属）を核とするユニットであり、「二月八」は二月八日に行われるナシ族のサンド神の祭りをモチーフにしたものである。二〇一〇年に発売された和慧珺のアルバム「玉龍山のふもとのナシ少女」では、「ナシ族がナシ語を話さなければ先祖が怒る。ナシ族がナシの踊りを踊れなければ祖先に申し訳ない」という歌詞が見られるほど、ナシ語やナシ族の文化を強く意識したものとなっている。

二〇〇七年前後から、麗江市古城区の小学校ではナシ語の童謡の採集とその普及活動が行われている。古城区白龍潭小学校の教師のグループは、子供たちの間で歌われるナシ語の童謡を採集し、それをナシ族文字方案を用いて出版、教材として授業に活用している。[18] さらに二〇一〇年にはDVD教材を作成し、香港の資産家の援助を得て、麗江の主要な小学校に寄贈した。この教材の画面ではナシ族文字方案が歌詞の字幕として使われている。このような活動はトンバ文化以外のナシ族文化に着目したものであり、彼らの考える「正統的な文化」という考え方

に一石を投じるものである。童謡の保存活動はおそらくこれ以前には全く行われていなかったと思われる。筆者は、二〇一〇年九月に行われたＤＶＤ教材の寄贈を記念する座談会に出席する機会を得たが、同席した同小学校の教師は皆涙ながらにこの活動の困難さを述べており、トンバ文化の陰で、ほとんど着目されて来なかった文化を保存・継承する活動の非常な困難さが実感されるものであった。

二〇一一年から、ラジオ局、麗江人民広播電台ではナシ語の会話番組が始まった。これは、「私とナシ語を学ぼう（跟我学説納西話）」と題され、定時のニュースの後にわずか数分間ずつではあるが、一日五回繰り返し放送されている。その内容はナシ語で常用される単語や、短い会話文を中心としたもので、一回の放送につき、いくつかの単語と三つから四つのセンテンスが、漢語、ナシ語の順に発音される。文の中のそれぞれの単語の解説や、文法の説明などは一切なく、ほぼ丸暗記に近い性質のものである。この放送は、当初はナシ語が話せないナシ族の子供たちに向けた放送として企画されたものと思われるが、その簡潔な内容と実用性から、現在ではごく最近麗江にやって来たナシ族以外の外来人口の聴取者にも支持されているようである。[19]

二〇一二年、明代のナシ族の土司を題材としたテレビドラマ、「木府風雲」が中共雲南省委員会宣伝部、雲南電視台、雲南潤視栄光影業制作有限公司などの共同で制作された。監督は中国の有名俳優である于栄光であり、彼自身も劇中の重要な役柄として出演している。全四〇回に及ぶこのドラマは、初め六月下旬に中国中央電視台のドラマチャンネルで放送された。この放送で、連続ドラマとしては視聴率の記録を更新するほどの大きな反響を得、その後、同じく中央電視台の第一チャンネルで再放送された。麗江のナシ族を扱ったドラマが、これほどの規模で大々的に制作され、かつ中国のメディアの中心に位置する中央電視台で高視聴率を獲得することは前代未聞の出来事と言えるであろう。中央電視台での放送後ほどなく、四〇回分全てを収録したＤＶＤもリリースされ、中国国内はもとより国外でも購入が可能となった。このドラマのヒットは、中国では同年の少数民族関係の大きな話題の一つであり、旧暦の大晦日に放送される中央電視台の年越し番組「春節聯歓晩会」でも、このドラマの主題歌である「浄土」が歌われた。この曲を歌うのは、全国的な人気歌手で俳優でもある孫楠である。（写真三）

このドラマがもたらしたもう一つの収穫は、そのナシ語吹き替え版の制作である。同年の後半から、麗江市ではナシ語版の

（写真３）長編歴史ドラマ「木府風雲」のポスター

制作が始まり、二〇一三年の春節時期に合わせて麗江電視台で放送された。前述したように、これ以前にもいくつかの映画のナシ語吹き替え版は制作されていたものの、その数や声優としてそれに関わるナシ族の人数も限られていた。一方、「木府風雲」では全四〇回というその規模や、登場人物の多さと人物描写の多様さにより、ナシ語歌曲の歌手などを含む若手の人材が大々的に起用されることになった。これにより、吹き替えの技術継承や、ナシ語声優の人材育成が大幅に進んだのである。ところで、このナシ語版制作の過程では、一旦はナシ族文字方案によるナシ語の字幕を加えることも検討されたという。しかし、時間的な制約と、ナシ族文字方案が十分に普及していないという現状や、これまでに出版物などで使われた表記には不統一が見られることなども障害となり、最終的には断念するに至ったという。[20] ここにも、ナシ族文字方案の運用における難しさを見ることができる。

二〇一二年の六月から玉龍県電視台で放送が始まったトーク番組に、「可喜可楽秀（ナシ語の発音は、コシ・コル・サ）」がある。タイトルをナシ語で解釈すれば「コ」は「声・言葉」、「シ」は「新しい」、「ル」は「古い」、「サ」は「話す」であり、全体で「古き話、新しき話を語る」という意味となる。これはナシ語の発音にほぼ同音の漢字を当てたものだが、同時に漢語としても「喜ぶべし、楽しむべし」という意味を含ませている。また、漢語の「秀」は「ショー」の音訳であるので、つまりは「コシ・コル・ショー」でもあるわけである。この番組は、麗江電視台の番組で司会などを務めてきたナシ族の和継軍氏が、毎回のテーマに合わせてナシ族文化の過去と現在を、軽妙なユーモアを交えながら語ってゆくもので、一種のトーク・エンターテイメント番組であると言えよう。観客席に招かれているのは年齢層のやや高いナシ族であり、おそらく農村部の居住者と思われる女性が多いのが目立っている。番組の冒頭から、和継軍氏のユーモアたっぷりの語りに観客席はどっと沸く。番組内で扱

われるテーマには、嫁と姑のいざこざや、酒の飲みすぎの害といった日常的なものから、最近の社会問題など広汎に及んでいる。そして多くの場合、これにまつわるナシ語の諺などが紹介され、観客もそれに頷く。また、扱う内容によっては中国古典からの引用もしばしば見られ、文化的な深みを与えようという姿勢も見て取れる。「可喜可楽秀」は、これ以前には全く見られなかったナシ語によるトーク番組であり、新しい世界を開拓したものと言えよう。これには司会者の和継軍氏の才能に負うところも大きい。しかし、内容的に見ると、この番組ではナシ族の諺や伝統的な風俗習慣への志向が強く、観客席の年齢層にも見えるように、現在のナシ族の若者の感覚とはややずれているようにも思われる。（写真四）

（写真4）
「可喜可楽秀（コシ・コル・サ）」の一場面

二〇一三年の九月から古城区電視台で放送が始まった「納西講聚営（ナシ・キャキュ・イ）」は、さらに新しいタイプのナシ語番組である。タイトルの「キャキュ」は「語る」、「イ」は「美味い、味わいがある」という意味であり、全体で「ナシの語りは味わいがある」という、ナシ語でよく使われる言い回しである。この番組のアイディアは、雲南省の省都である昆明市の雲南衛星電視台で制作され、全省に放送されている雲南方言番組「大口馬牙」にある。[21]「大口馬牙」は、漢語の雲南方言を話す男女二人の司会者によるトーク・バラエティ番組であり、生活に密着した様々な話題にまつわる映像やコントで構成される。この番組は雲南の方言番組の筆頭に数えられる人気を誇っており、女性司会者は雲南方言のタレントとしても活躍する。「納西講聚営」はそのナシ語版を目指したものであり、コントや映像もこれと似たものが多い。そのため放送開始直後には、「大口馬牙」の二番煎じに過ぎないとの批判もしばしば聞かれた。しかし、「納西講聚営」の後半に放送された「唐虎伯点秋香」のナシ語吹き替え版に対しては、麗江中心部の大研鎮方言で吹き替えられていることが注目された。[22]前述したように、これまでのナシ族におけるナシ語のイメージでは、大研鎮方言は最も漢語の影響を大きく受けた、言わば廃れかけた方言であったからである。麗江の地元紙である麗江日報には、この吹き替えに対する、ある大研鎮方言の話

者による論評が掲載されている。[23] そこでは、これまでのナシ語の吹き替えにおいて、麗江の中心であるはずの大研鎮の方言が聞かれないことにずっと疑問を感じていたこと、そして今回の「唐虎伯点秋香」が大研鎮方言で吹き替えられていることにようやく安堵したことが述べられている。しかしながら、急激な観光地化に伴い、麗江の旧市街ではナシ族の住民が激減していることも事実であり、記事にはこの吹き替えの担当者による「最後の世代の旧市街の人間として、旧市街の人間の誇りを表現せねばならない」という悲痛な言葉も引用されている。またこれ以外にも、「納西講聚営」では司会者の他に一般のナシ族のゲストが登場し、二人の間で日常的なナシ語の会話が交わされる。番組の中でこのような飾らない日常の言語が見られるようになったことも、この番組の大きな特色の一つである。（写真五）

（写真5）
「納西講聚営（ナシ・キャキュ・イ）」の一場面

四、おわりに—ナシ語意識の変遷と現状

一九九〇年代までのナシ族においては、麗江の中心部のナシ族にはかなり漢語が浸透していたこともあり、自民族の言語であるナシ語に対する意識はかなり希薄であったと言える。一九八〇年代のナシ族文字方案によるナシ語ローマ字の普及活動や、『麗江納西文報』の発行とナシ語書籍の出版、ナシ語による吹き替え映画などは、いずれもナシ族全体に認知され、浸透したとは到底言い難い状況にあった。こうした状況が大きく転換してゆくのは二〇〇〇年以降であり、その背景にあるのは麗江の急激な観光化と、それに伴う伝統文化の消失である。

一九九〇年代の初頭から、雲南省政府は観光開発を最重要政策の一つに据え、その一つに組み入れられたのが麗江であった。一九九五年、麗江に空港が開港したことで観光客数は増大し、一九九六年の大地震を経ながらも、一九九七年一二月に麗江旧市街がユネスコの世界文化遺産に登録されることで、麗江は雲南省で有数の観光地として開発された。これに伴い、観光開発を目当てにした外部からの流入人口は急増し、旧市街に居住し

ていたナシ族の多くは麗江の郊外に移り住んだ。こうして、ナシ族独特の文化とされるトンバ文化はもとより、日常的に話されるナシ語でさえも消滅の危機に瀕しているという認識が、一九九〇年代の後半になってようやくナシ族に自覚されてきたと言える。

しかしながらナシ族自身においては、彼らの求める正統的な伝統文化は、漢族文化の影響を深く受けた麗江の中心地にはもはや存在しないという考えが根強かった。そのため、二〇〇〇年以降に始まるナシ語によるニュースや映画の吹き替えは、いずれも中心部から遠く離れた地域の方言が「純粋」で「正統的」なものとして選ばれた。このような考え方には、伝統的なナシ族文化の代表とされるトンバ文化が、やはり麗江の中心地ではなく、漢族文化の影響の少ない辺鄙な農村部にしか残っていないということも、大きく影響を与えている。

この状況が変化を見せるのは、二〇〇五年以降であると見てよい。ナシ語による流行音楽の隆盛は、その一つの重要な突破口であったと言えるであろう。そして、近年の「納西講聚営」のようなテレビ番組に至って、ようやく日常的なナシ語の世界へと、その意識が到達したことが見て取れる。しかしながら、もはやこの時点では、急激な観光化が麗江の中心部、特に旧市街でのナシ族人口の激減をもたらしており、最もナシ族らしいイメージとして知られる旧市街において、これまで話されてきた大研鎮方言がまさに消え去ろうとしていることは皮肉でもある。現時点での旧市街の正確なナシ族人口は不明であるが、現在の麗江旧市街は、ナシ族文化の香る「世界文化遺産」というイメージから大きく外れ、すでに「ナシ族の消えたナシ族の街」になったと言う方が正しいであろう。[24]

注

（1）中国で少数民族と認定されている「ナシ族」には、最も人口の多い「ナシ」の他、「モソ（ナ）」、「リュヒ」、「マリマサ」など、いくつかの下位集団が存在する。本稿で主要な考察の対象とするのは、この中の「ナシ」である。

（2）チベット・ビルマ語派内部の下位分類には諸説がある。西田龍雄「チベット・ビルマ語派」『言語学大辞典 第2巻 世界言語編（中）』（三省堂書店、一九八九年）七九一―八二二頁、ラムゼイ・S・R著 高田時雄ほか訳『中国の諸言語―歴史と現況』（大修館書店、一九九〇年）三二八―三四一頁、戴慶厦・劉菊黄・傅愛蘭「関于我国藏緬語族系属分類問題」（『雲南民族学院学報』一九八九年第三期）八二―九二頁など。

（3）諏訪哲朗『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』（学習院大学、一九八八年）第五―六章に見られる見解など。

（4）ナシ族の話す漢語の標準語は俗に「麗江普通話」と呼ばれ（「普通語」

は中国語で「標準語」・「共通語」の意味である）、その発音から引き起こされる誤解などが、しばしば笑い話の種にされることがある。しかし、これも多くのナシ族が就学や仕事で他の地域へ出ていることの裏返しであろう。

（5）ナシ族の使っていた伝統的な文字には、この他にもゴバ文字（哥巴文）、ラコ文字などがあるが、最も多くの資料が残されているのはトンバ文字である。ナシ族の文字の概要については、黒澤直道「ナシ語の文字とその背景」（『國學院雑誌』第一一四巻第七号、二〇一三年）に述べた。

（6）木仕華「論麗江納西族母語文教育伝承実践中的経験与問題」（鐘進文ほか主編『民族語文教学研究 第一輯』中央民族大学出版社、二〇一一年）に見られる郭大烈氏による調査。ただし調査時期は不明であり、現状ではさらに少ない可能性が高い。

（7）李継群・和紅燦「文化遺産地双語教育実践研究—以納西族為例」（郭大烈・黄琳娜・楊一紅編『納西母語和東巴文化伝承与実践』雲南民族出版社、二〇一二年）、四六頁。ただし、調査時期は不明。

（8）和冬梅「納西童謡在学校伝承的一些思考和嘗試」（『麗江民族研究』第二輯、雲南民族出版社、二〇〇八年）二二四頁。

（9）趙慶蓮「麗江古城納西族双語状況研究」（『母語的消失与存留—第三届中国雲南瀕危語言遺産保護国際学術研討会論文集』民族出版社、二〇一一年）。調査時期は明記されていないが、おそらく二〇〇九年頃と思われる。

（10）ナシ族におけるナシ語の教育については、黒澤直道「雲南省麗江におけるナシ（納西）語教育の現状」（『國學院雑誌』第一〇六巻第八号、二〇〇五年）に述べた。

（11）姜竹儀「積極推行納西文提高納西族文化」（『民族語文』一九九四年第三期）四八頁。

（12）郭大烈・黄琳娜・楊一紅『納西母語和東巴文化伝承与実践』（雲南民族出版社、二〇一二年）四頁。

（13）発行時期によって、この他にも『納西小報』、『麗江報・納西文版』、『麗江納西文小報』の名称がある。

（14）これらの出版物の冊数や内容については、黒澤直道「ナシ（納西）語による出版物について」（『國學院大學紀要』第四七号、二〇〇九年）に述べた。

（15）その後、二〇一四年七月の時点では、このニュース番組は放送時間が一五～三〇分に拡大されている。

（16）「黄河絶恋」は、一九九九年、上海電影制片廠制作。抗日戦争末期、黄河流域に不時着した米軍機のパイロットと八路軍兵士の交流を描く。「張思徳」は、二〇〇四年、中共北京市委員会宣伝部・北京電影制片廠ほか共同制作。「為人民服務」の模範とされる張思徳の生涯を描く。「暖春」は、二〇〇三年、北京電影制片廠制作。山村の孤児を引き取ろうとした老人と家族の相克を描く。

（17）これらの歌手の詳細については、黒澤直道『ナシ族の古典文学—「ルバルザ」・情死のトンバ経典』（雄山閣、二〇一一年）一〇九－一一三頁に述べた。

（18）麗江市古城区白龍潭小学『納西童謡』二〇〇七年。和冬梅「納西童謡在学校伝承的一些思考和嘗試」『麗江民族研究』第二輯（雲南民族出版社、二〇〇八年）。

（19）現在、この番組を基にしたCD付き書籍の出版が準備されている。

（20）「納西語版《木府風雲》今晩開播喉喂！」（雲南信息報・電子版、二〇一三年一月三一日、四－五面・麗江特別報道）。

（21）「大口馬牙」とは、昆明の漢語方言で「後先を顧みない誇大な物言い」を意味する。

（22）「唐伯虎点秋香」は、香港の周星馳主演の喜劇映画。一九九三年、永

盛電影制作有限公司制作。

(23) 左手「声音穿超時空」（麗江日報、二〇一三年一〇月二四日）。

(24) 張天新・山村高淑両氏の指摘によれば、ユネスコ世界遺産委員会による麗江旧市街に対する評価は主として都市景観と住宅建築にあり、居住するナシ族の生活文化の重要性は十分に評価されていないという（「世界遺産登録は地域に何をもたらすのか―雲南省麗江の経験」『北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」報告要旨集』、二〇〇八年三月）。従ってこれも、中国における過度の観光開発の方針とともに、麗江旧市街の現状をもたらした大きな要因であると言えよう。このような評価の背景に何があるのかを探ることは、本稿の範囲を大きく超えるものであるが、いずれ検証が必要になると思われる。